

VI 常設委員会

教育予算委員会

1. 構成員

[委員長] 菱田治子 (教養・基礎系)

[委員] 山田雅子 (基礎系看護学・研究センター)、
林 直子 (臨床看護学Ⅰ)、麻原きよみ (臨床看護学Ⅱ)、高橋昌子 (教務課)、島田裕司・豊島景子 (経理課)

2. 職務・役割

教育予算委員会は、常設委員会として組織上は位置づけられているが、委員会委員の選出および活動は2011年11月から2012年1月までである。

- 1) 学部および大学院の正規の教育活動および委員会活動に係る次年度予算の申請を予算編成方針に基づいて調整し、取りまとめる。
- 2) 取りまとめた申請予算について、理事長、学長および事務局長へ報告する。

3. 活動内容

- 1) 2012年度教育予算について、予算委員会で次のように予算申請の調整を行い、予算総額51,815千円とした。
 - (1) 予算委員会開催回数：予算委員会の日程調整、予算申請方法・配布資料の確認、予算申請書の審査、修正予算の確認のため、計4回の委員会を開催した。
 - (2) 教育予算基本方針：教育予算を検討するにあたり、教育の質の担保に不可欠な予算を優先し、可能な限りの経費削減に努めることとした。
 - (3) 予算申請に関する説明会：2011年11月1日全教職員に、「2012年度予算編成方針」「2012年度の教育予算の概算要求に当たっての基本的な方針について」「予算申請用紙」についての説明会を行い、2012年度教育予算総額は45,000千円以内を目標とすることを伝えた。また、予算関連の資料はイントラにアップし、周知を図った。
 - (4) 予算調整にあたって
第一次予算申請総額は71,351千円 (2011年度申請額より42,017千円減) であり、26,351千円の削

減が必要であった。委員会では、申請された教育予算について以下の点を確認・検討した。

- ① 授業に関する科目予算および教務予算については、申請基準に照らし、ア) 申請根拠、イ) 優先度、ウ) 単位数および教育内容・方法、エ) 研究費との関連の4点をもとに、教育予算として適切であるか否かを検討した。
- ② 委員会活動予算については、委員会活動の内容と照合し適切であるか否かを検討した。
- ③ 新規申請および増額予算については、その理由や必要資料の添付による説明を求め、教育予算として妥当であるか否かを検討した。
- ④ 必要時予算担当者にヒアリングを行い、実質的に必要な予算のみを計上することを徹底した。
- ⑤ 申請のあったDVDのうち、7件244千円分については今年度ビデオ予備費で購入することとした。
- ⑥ 外国からの客員教授招聘費用1,400千円、看護ネット維持費2,531千円は大学全体予算とした。また、教務システム Web システム導入費5,528千円については大学全体で検討してもらうこととした。
- ⑦ 委員会予算のうち、次の予算については大学全体予算とした。

国際交流委員会	
交換留学生短期受入費用981千円のうち、補助金対象経費434千円の1/2	217千円
自己評価委員会	
大学基準協会年会費	200千円
大学史編纂資料室委員会	
旅費他	1,460千円
情報システム委員会	
IT 関係整備費	3,931千円
合計	5,808千円
- ⑧ 今回の委員会では、2012年度実習費等 (実習謝金、実習打ち合わせ費用、非常勤講師、特別講義) に関する予算についての検討する機会が設けられ、実習等に関連する予算申請については申請基準に照らし検討した。

2) 2012 年度教育予算調整結果

(1) 申請された教育予算に対し最大限の削減修正を行った結果、最終予算は 51,815 千円（大学院研究費 6,600 千円を除くと 45,215 千円）となり、目標の 45,000 千円には届かなかった。増額した理由は、以下のことが考えられた。

- ① 学部で人数の多い学年が進級していくのに伴い、実習にかかる経費などが増えている。
- ② 大学院に新たな専攻領域が新設され、それに伴う科目数が増えている。
- ③ これまで補助金で申請していた機器・備品の申請ができなくなった。
- ④ 機器・備品の耐用年数が過ぎ、買い替えの必要のあるものが増えてきている。
- ⑤ 独立行政法人化の影響か、大学院生の実習費が高額になってきている。

4. 課題

2012 年度教育予算調整の過程において、今後の課題を次のようにまとめた。

- 1) 大学全体の長期および短期将来構想に基づいた単年度計画の明確化とその予算化を実現するため、申請予算の検討に先だってこれらのことが明らかにされる必要がある。
- 2) 適切な予算申請を実施していくには、予算委員会を前期から設置することが望ましい。
- 3) 今回、e-learning を利用した授業内容を推進するために科目レベルでの申請があった（コンテンツ作成費、サーバー等運営管理費）。施設整備、IT 関連整備に関わる経費は高額となり、大学全体としてのシステムを見据えての計画的な予算化が必要である。
- 4) 機器・備品に関しては、耐用年数、学生数を考慮して計画的に買い替えを行っていくための予算化が必要である。
- 5) 予算削減のためには、現在行われている科目ごとの予算申請方法を、カリキュラムの変更に合わせ領域ごとにまとめることや、毎年定期的に必要な予算はそのまま認め変更部分のみを申請するなど、申請方法を検討する。

新規申請、増額申請にあたっては、引き続き説明書や資料の添付を徹底する。

- 6) 実習関係費用の取り扱いおよび大学院の特別講義時間数についての基準や限度額を設けることについ

て引き続き検討していくことが必要である。

- 7) 非常勤講師・特別講師の申請については、予算申請時に講師が未定であっても分野や領域など分かる範囲で講師に関する情報を明記するよう徹底する必要がある。
- 8) TA・臨時助手については、科目や領域によって申請時間数の差が非常に大きく、特に気になるものについては学部長にヒアリング等を一任することとしたが、ある程度の基準を設ける必要がある。
- 9) 大学院研究費については、実習費等を考慮するなど取扱方法を検討する。

広報委員会

1. 構成員

[委員長] 江藤宏美

[委員] 池口佳子、大畑美里、大森純子、角田秋、山本由子、櫛田智恵美、進藤務、中村寧孝、福田昌

2. 役割・職務

大学のミッションやビジョンを踏まえ、大学広報戦略の検討、学外に向けた広報活動の企画・実施（大学説明会・オープンキャンパス、ホームページの刷新、大学案内冊子の作成等）を展開した。広報委員会の広範囲にわたる役割をスムーズに、効率よく遂行するために、昨年に引き続きチーム制にして各プロジェクトを自律して遂行した。

- 1) オープンキャンパスの開催：（主メンバー）大森・角田・池口
- 2) 大学ホームページ・Active Page 作成：（主メンバー）江藤・中村・福田
- 3) 大学案内パンフレット作成：江藤・進藤・福田
- 4) 学生広報委員会との連携：山本・大畑・櫛田・福田

3. 活動内容

プロジェクトごとに、年頭に目標と年間計画を立て、それぞれのチーム内で緻密に活動を展開した結果、昨年よりさらに進展がみられた。以下の通りである。

- 1) 新たな形式および体制を充実させたオープンキャンパスの企画・運営学生広報委員会との共同企画・運営による、昨年度から導入した新たな形式（土曜・

日曜の午後開催、来場者は、ガイダンスや各種相談・学生との懇談・学内見学ツアー・看護技術体験や学生生活紹介コーナー等に自由に参加できる形式)のオープンキャンパスを6月下旬1回、7月下旬2回の計3回実施した。大学院入学志願者向けのオープン研究室も同時開催した。昨年の新企画からさらに内容の充実を図り、ホールでのプログラムの変更、だれでも参加できる学生による学内見学ツアー、看護技術体験コーナー、学生生活紹介コーナーなどを変更した。学生と直接交流することを通じ、本学の伝統ある教育理念や闊達な学びの場としての大学の雰囲気を感じることができるとの好評を得た(各回の来場者数:表1参照)。

2) 大学ホームページのリニューアル受験生を対象とした新しいホームページを作成・公開した。トップページに大学の写真を配しインパクトを高め、聖路加のイメージを示した。枠組みを「大学案内」「学部」「大学院」「学生生活」「入試案内」「聖路加の活動」「施設・関連機関」とし、受験生が必要な情報にアクセスしやすいよう工夫した。大学の活動を紹介するために、今年度大学をあげて取り組んでいる「福島県災害支援プロジェクト〜きぼうときずな」、国からの研究助成を受けて活動している複数のプログラム、大学の関連サイトの計11項目をバナーとした。新着情報は、「ニュース&トピックス」「イベント」に分け、最新の情報を発信できるようにした。

また、学内の教職員対象に、情報発信をしているWebを調査し44サイトが開かれていることがわかった。

Active Page 作成に関しては、「聖路加同窓会」「アジア・アフリカ助産研究センター」のページを作成し公開している。今年度は情報公開を希望する学内の教職員に対する「作成マニュアル」をつくることとどまった。

3) 2012-2013大学案内パンフレットのリニューアルコンペにより、大学案内パンフレットの作成業者の選定を行った。新しい業者(梁プランニング)とともに、従来よりも学生を主体とした内容を盛り込み、受験生向けの明るいイメージの冊子となるように工夫した。また、Webパンフレットシステム(オンライン上でパンフレットを閲覧できるシステム)を導入した。

4) 学生広報委員会との連携オープンキャンパス、白楊祭、母校訪問等について詳細に話し合い、学生の

自主性を尊重しながら積極的な広報活動を展開した。

- ① オープンキャンパスの開催にあたり、学生広報委員会と連携し、計画・運営を行った。
- ② 白楊祭の「受験生相談コーナー」を学生広報委員と連携して行った。
- ③ 夏休みに企画した母校訪問では、総数25件(うち直接訪問20件、大学よりパンフレット送付5件)実施し、昨年より多くの学生が参加した。

4. 課題

今年度は大学ホームページをはじめとするWebや大学案内冊子作成などの受験生をターゲットにした取り組みに重点を置き、各プロジェクトチームによる活動はほぼ目標通りに遂行することができた。他部門や委員会、各部署との連携について課題は残ったが、大学の将来構想とも絡めて再検討していく必要がある。以下は、各プロジェクトの課題を挙げた。

1) オープンキャンパスの受験生を対象とした新たな企画と時期の検討

① 今期の検討事項

- ・プログラムの見直し: 模擬授業の実施回数の検討、学生と連携したプログラムの充実
- ・受付時間前の来場者への対応: 受付開始時間の設定・受付開始前までの待機場所
- ・土日の施設管理上の対応: 2号館開館およびチャペル見学対応の警備体制

② 広報ツールの開発・検討: 実用的な大学オリジナルグッズの制作

③ 次年度以降の新たな企画

- ・<受験生予備軍企画>未だ志望校を絞り込んでいない受験生を対象とした説明会(秋季~冬季)
- ・<志願者企画>本学への志願を決めた受験生・合格者を対象とした説明会(入試前後)
- ・<対象限定シリーズ企画>保護者も視野に入れた対象限定の小規模の説明会

2) 受験生に最新情報を発信する大学ホームページ

- ① 受験生が必要とする情報を発信するための携帯モバイルサイトの検討・大学案内の冊子との連動
- ② 新着情報・イベントなどの見やすい提示の検討
- ③ 更新をスムーズに簡便に行えるようなシステム構築
- ④ アクセス解析による、公開しているコンテンツ

が適切か否かの評価と改善

- ⑤ Active Page に関しては、掲載の方法・手順・掲載にあたっての運用システム構築とルールづくり、「作成マニュアル」をもとに教職員への Web 作成支援

3) 受験生をターゲットにした大学案内パンフレット

① 新パンフレットの効果検証

② Web パンフレットシステムのアクセス解析によるニーズ調査

4) 学生広報委員会との有機的連携受験生獲得につながる、より多くの積極的な学生ボランティアの確保

5. 資料・データ

表1 オープンキャンパス来場者数

(単位：人)

	開催日時	来場者数 (前年度数)	内 訳
1 回目	6 月 25 日 (土) 13:00~16:30	312 (前年度：322)	学部志願者 183・大学院志願者 4・保護者 125 (前年度：学部志願者 216・大学院志願者 10・保護者 96)
2 回目	7 月 30 日 (土) 13:00~16:30	823 (前年度：803)	学部志願者 486・大学院志願者 58・保護者 279 (前年度：学部志願者 448・大学院志願者 60・保護者 295)
3 回目	7 月 31 日 (日) 13:00~16:30	695 (前年度：636)	学部志願者 413・大学院志願者 5・保護者 277 (前年度：学部志願者 377・大学院志願者 10・保護者 249)

学園ニュース委員会

1. 構成員

[委員長] 菊田文夫

[委員] 片岡弥恵子 蜂ヶ崎令子 稲田昇三

2. 役割 (規程)

学園ニュースの編集、発行

3. 活動内容

学園ニュース No. 295 から No. 298 を 4号編集・発行した。掲載記事概要は下記のとおり。

No.	発行日 発行部数	巻頭記事/特集/その他	備考
295	2011 年 4 月 27 日 900 部	トップ「ようこそ聖路加看護大学へ」 学長 井部俊子	印刷紙は学生家族、役員、その他へ送付
		特集 新入学生からのひと言集 新入教職員 自己紹介 ありがとうございました 退職教職員 実りある学生生活のためにー自治会、クラブ、サークル、ボランティア活動の紹介 学部卒業生および大学院修了生の進路	
		特別 東日本大震災で被災された学生・ご家族に心よりお見舞い申し上げます	
296	2011 年 7 月 14 日 1,300 部	トップ「こころの回復(リカバリ)を支えるケア；東日本大震災の被災地で、今ここで」 精神看護学 教授 萱間真美	7 月末のオープンキャンパス来訪者にも配付するため、印刷部数を増加させた
		特集 災害地支援活動レポート 体育 Day! オリエンテーションセミナー	
		INFORMATION 2010 年度決算報告	
297	2011 年 12 月 8 日 900 部	トップ「旅の途中で、泊まる所もなく」 チャプレン シモン・ペテロ 上田憲明	
		特集 クリスマス特別企画 日野原重明理事長インタビュー 第 35 回 白楊祭「今を大切に、輝ける未来に向かって」	
		活動レポート きぼうときずな「福島県災害支援プロジェクト」報告 アジア・アフリカ助産研究センターの活動	

298	2012年 3月2日 1,150部	トップ「いざ出発、豊かな人生を！」 学部長・研究科長 菱沼典子	
		特集 学生支援推進プログラム 創立記念式典（垣添忠生先生特別講演「がんと人生」 表彰者 卒業・修了にあたって（ひと言集）	
		INFORMATION 2012年度予算	

4. 課題

- 1) 昨年度、広報委員会の1ユニットとして活動したが、今年度は再び独立して編集に当ることになった。発行日の都合により月初に企画・編集会議を開催したい。
- 2) イントラネットでの掲示のみとしたが、目だつた混乱は生じていない。今後は大学ホームページからも閲覧できるよう調整したい。
- 3) 2012年7月発行予定分を300記念号として発行したい。

確認し、適正枚数と今後の対策については検討することとした。

また、今年度も卒業論文作成のための優先席をパソコンルームに設けることを検討した。今年度は15席の優先席を設け、優先席を示す札を貼って明示した。

2) 印刷枚数適正化への取り組み

学修目的外使用（大量印刷物の放置行為等）を防止、学修環境の向上をはかるため、概ね各学年ごとに印刷枚数上限値を設定した。上限値を超え印刷停止解除を申請した者は約10%であり、各学年とも90%が制限枚数内におさまった。また、学生活動（委員会等）や研究補助等による印刷については別途IDを付与した。次年度の設定枚数については、今年度の実績をもとに一部コースの上限値を変更した。適正枚数の検討は今後も継続していく。

3) インターネット無線接続サービス(Wi-Fi)の試験提供

大学院生を対象に、インターネット無線接続サービスの試験提供を2011年11月より3カ月間、2号館の一部で実施した。試験提供期間中、運用上特に問題がなかったため2月以降も試験提供期間を延長し、4月以降に本サービス開始とすることとした。試験提供期間終了後に対象者へのアンケートを実施し、23人より回答を得た。回答者のうち8人がこのサービスを利用し、利用者全員が自分で接続設定を行うことができていた。接続機器はノートPC、スマートフォンであり、ウェブ検索、大学のメール、ファイル保存庫、SNSやブログ等を利用していた。利用しなかった15人のうち9人はサービスが必要ないと回答し、利用方法がわからなかった、サービスを知らなかったと回答したのは6人であった。今後利用を希望する人は15人、サービスの拡大を希望する場所として図書館、2号館講義室を選択した人が多かった。

情報システム委員会

1. 構成員

〔委員長〕 萱間真美

〔委員〕 小野智美、宇都宮明美、本田晶子、高島直人、平良智子、佐藤晋巨、中島 薫、新谷隆弘、秋山武則

2. 役割・職務

- 1) コンピュータシステムに関する運用、管理上の諸問題の検討
 - ・聖路加看護大学コンピュータネットワーク利用規程
 - ・聖路加看護大学コンピュータネットワーク倫理規程
 - ・情報システム委員会規程
- 2) システムの運用の向上を図るための企画

3. 活動内容

1) 学生情報システム委員会に関して

今年度は、印刷枚数超過における申請者が数名出現したため、適正枚数について検討した。限度枚数超過申請の場合には有料にするなどの意見もあったが、年度末の印刷枚数状況を情報システム委員会で

4. 課題

1) 昨年度からの課題への取り組み

今年度は、プリントアウト上限枚数の設定を、学部・大学院・認定コースのすべての学生について実施した。上限の設定については、過去4年間の印刷枚数調査を根拠としたため、円滑に実施できた。一部のコースで、授業資料提供形態が変更されたこともあって、来年度に向けては、今年1年間の印刷枚数調査をもとに、印刷枚数上限の調整を行う予定である。昨年度からの準備のプロセスを経て、学生情報システム委員会の協力や、教職員が情報システムに関するオリエンテーションを全学年に意識的に行ったことにより、意識を高める取り組みが成功したと考える。今後も、学生・教職員ともに情報環境を意識的に利用していけることを目指した活用を行いたい。

2) 今後の課題

2012年度春からのインターネット無線接続サービスの試行開始に向け、利用者のニーズや運用面における問題等を調査するため、2011年11月から大学院ラウンジに限定しサービスを開始した。2月に実施したアンケート調査の結果、運用面での問題は特に見られなかったが、利用面では図書館や講義室など

学習の場で活用できるエリアへの拡大を希望する意見が多く見られた。今後はアンケート結果を参考にサービスエリアの拡大を図るとともに、学部生等に対する利用者サービスの範囲拡大も予想されるため、利用者認証などのセキュリティに関する運用面の見直しについても検討が必要である。

その他、前述の無線接続サービスも含め今後ますます増えると予想される情報サービスを継続するための学内予算確保が重要な課題となる。Webを使った教育素材と活用できる環境への取り組みは、将来構想でも多く望まれた内容であった。年々、国からの補助金も減少しており、予算措置を含めた長期計画が必要である。

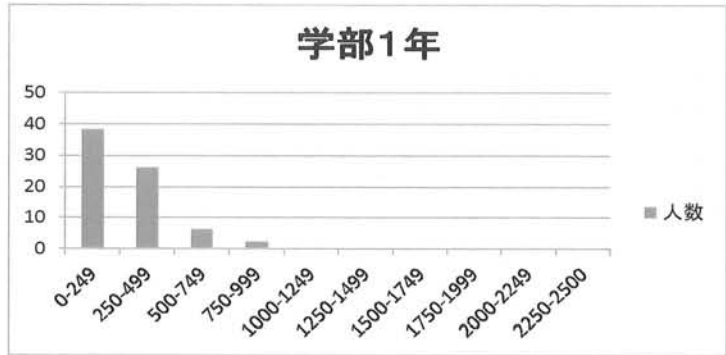
5. 資料・データ

- ①印刷データ（学部4年分：2011年4月1日～2012年3月31日）
- ②印刷データ（学士編入3年分：2011年4月1日～2012年3月31日）
- ③印刷データ（修士2年分：2011年4月1日～2012年3月31日）
- ④印刷データ（博士3年分：2011年4月1日～2012年3月31日）

2011年度印刷枚数
集計期間：2011/04/01-2012/03/31

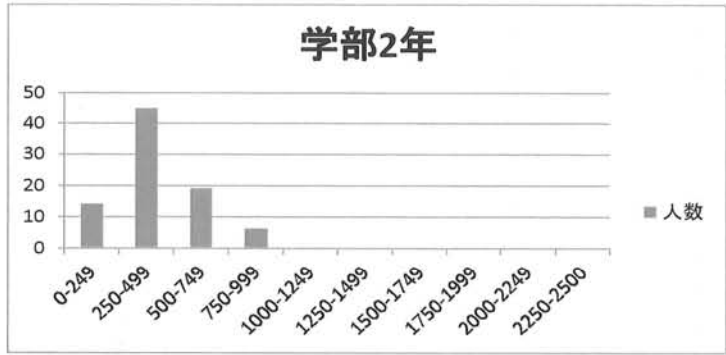
学部1年
総印刷枚数 19,711
90パーセンタイル 536
上限枚数 1,000

印刷枚数	人数	累積%
0-249	38	53%
250-499	26	89%
500-749	6	97%
750-999	2	100%
1000-1249	0	100%
1250-1499	0	100%
1500-1749	0	100%
1750-1999	0	100%
2000-2249	0	100%
2250-2500	0	100%
計	72	



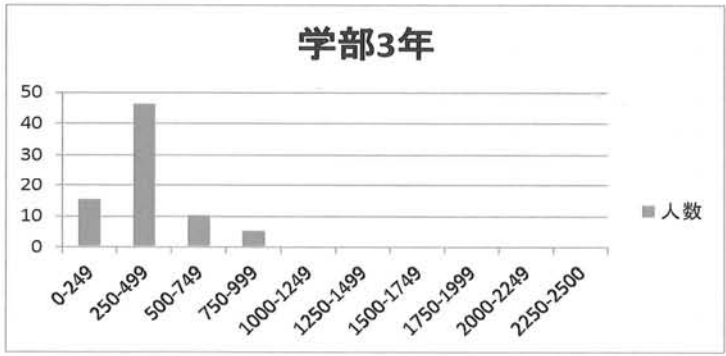
学部2年
総印刷枚数 36,254
90パーセンタイル 717
上限枚数 1,000

印刷枚数	人数	累積%
0-249	14	17%
250-499	45	70%
500-749	19	93%
750-999	6	100%
1000-1249	0	100%
1250-1499	0	100%
1500-1749	0	100%
1750-1999	0	100%
2000-2249	0	100%
2250-2500	0	100%
計	84	



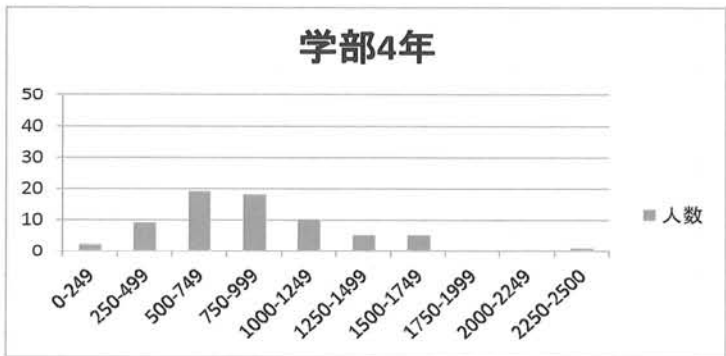
学部3年
総印刷枚数 30,174
90パーセンタイル 688
上限枚数 1,000

枚数	人数	累積%
0-249	15	20%
250-499	46	80%
500-749	10	93%
750-999	5	100%
1000-1249	0	100%
1250-1499	0	100%
1500-1749	0	100%
1750-1999	0	100%
2000-2249	0	100%
2250-2500	0	100%
計	76	



学部4年
総印刷枚数 58,949
90パーセンタイル 1,437
上限枚数 2,000

枚数	人数	累積%
0-249	2	3%
250-499	9	16%
500-749	19	43%
750-999	18	70%
1000-1249	10	84%
1250-1499	5	91%
1500-1749	5	99%
1750-1999	0	99%
2000-2249	0	99%
2250-2500	1	100%
計	69	

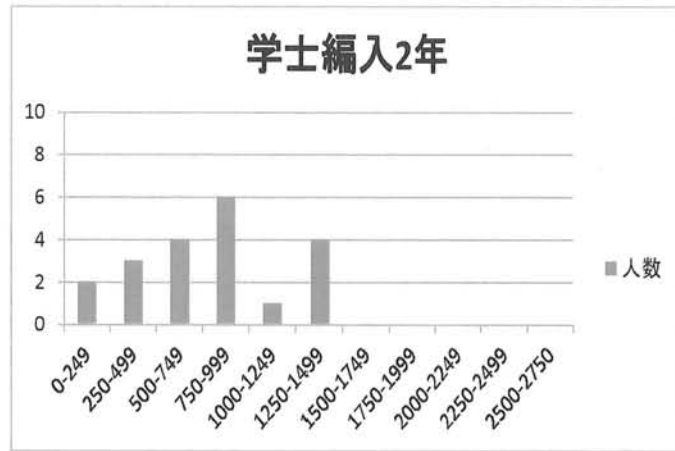


2011年度印刷枚数
集計期間：2011/04/01-2012/03/31

学士編入2年

総印刷枚数 15,310
90パーセンタイル 1,337
上限枚数 1,500

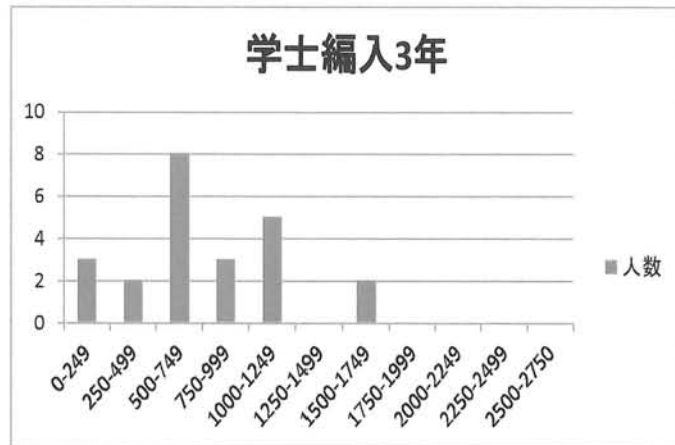
枚数	人数	累積%
0-249	2	10%
250-499	3	25%
500-749	4	45%
750-999	6	75%
1000-1249	1	80%
1250-1499	4	100%
1500-1749	0	100%
1750-1999	0	100%
2000-2249	0	100%
2250-2499	0	100%
2500-2750	0	100%
計	20	



学士編入3年

総印刷枚数 18,083
90パーセンタイル 1,240
上限枚数 1,500

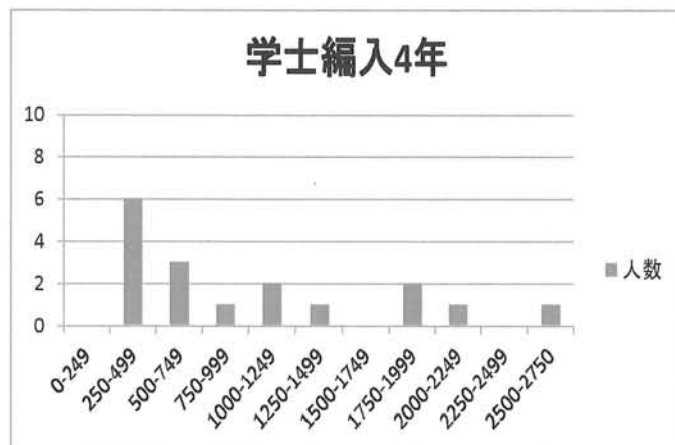
枚数	人数	累積%
0-249	3	13%
250-499	2	22%
500-749	8	57%
750-999	3	70%
1000-1249	5	91%
1250-1499	0	91%
1500-1749	2	100%
1750-1999	0	100%
2000-2249	0	100%
2250-2499	0	100%
2500-2750	0	100%
計	23	



学士編入4年

総印刷枚数 16,496
90パーセンタイル 1,931
上限枚数 2,000

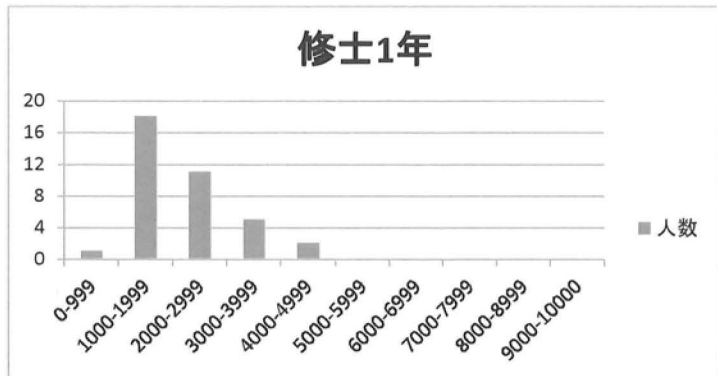
枚数	人数	累積%
0-249	0	0%
250-499	6	35%
500-749	3	53%
750-999	1	59%
1000-1249	2	71%
1250-1499	1	76%
1500-1749	0	76%
1750-1999	2	88%
2000-2249	1	94%
2250-2499	0	94%
2500-2750	1	100%
計	17	



2011年度印刷枚数
集計期間： 2011/04/01-2012/03/31

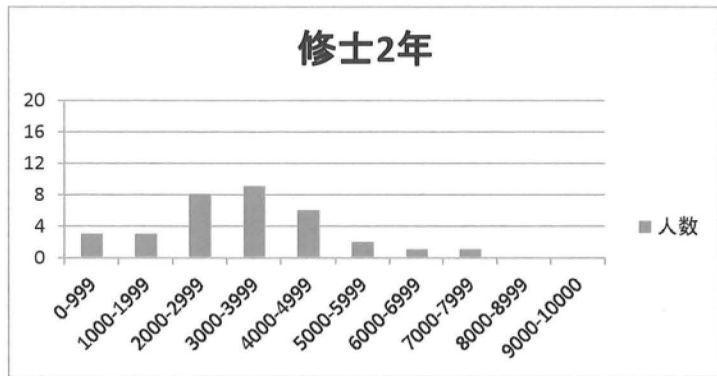
修士1年
総印刷枚数 81,480
90パーセンタイル 3,419
上限枚数 4,000

枚数	人数	累積%
0-999	1	3%
1000-1999	18	51%
2000-2999	11	81%
3000-3999	5	95%
4000-4999	2	100%
5000-5999	0	100%
6000-6999	0	100%
7000-7999	0	100%
8000-8999	0	100%
9000-10000	0	100%
計	37	



修士2年
総印刷枚数 107,083
90パーセンタイル 5,343
上限枚数 8,000

枚数	人数	累積%
0-999	3	9%
1000-1999	3	18%
2000-2999	8	42%
3000-3999	9	70%
4000-4999	6	88%
5000-5999	2	94%
6000-6999	1	97%
7000-7999	1	100%
8000-8999	0	100%
9000-10000	0	100%
計	33	

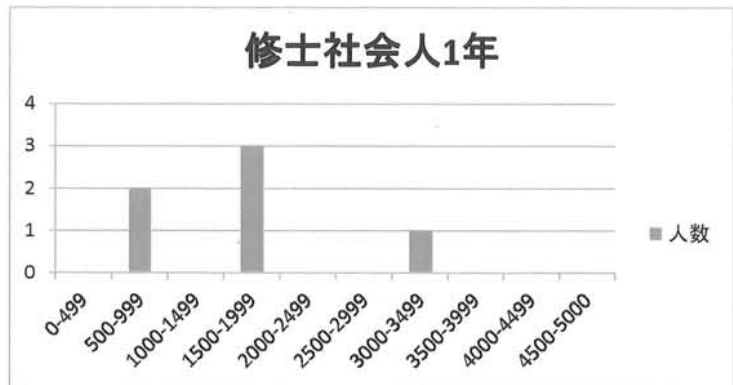


2011年度印刷枚数
集計期間：2011/04/01-2012/03/31

修士社会人1年

総印刷枚数 10,100
90パーセンタイル 2,585
上限枚数 4,000

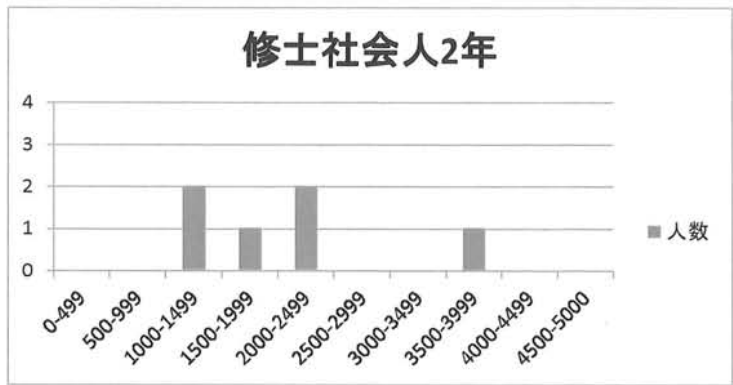
枚数	人数	累積%
0-499	0	0%
500-999	2	33%
1000-1499	0	33%
1500-1999	3	83%
2000-2499	0	83%
2500-2999	0	83%
3000-3499	1	100%
3500-3999	0	100%
4000-4499	0	100%
4500-5000	0	100%
計	6	



修士社会人2年

総印刷枚数 12,418
90パーセンタイル 2,963
上限枚数 4,000

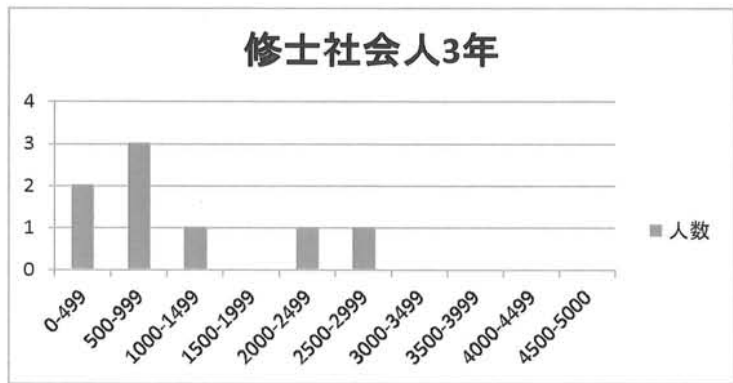
枚数	人数	累積%
0-499	0	0%
500-999	0	0%
1000-1499	2	33%
1500-1999	1	50%
2000-2499	2	83%
2500-2999	0	83%
3000-3499	0	83%
3500-3999	1	100%
4000-4499	0	100%
4500-5000	0	100%
計	6	



修士社会人3年

総印刷枚数 9,037
90パーセンタイル 2,264
上限枚数 4,000

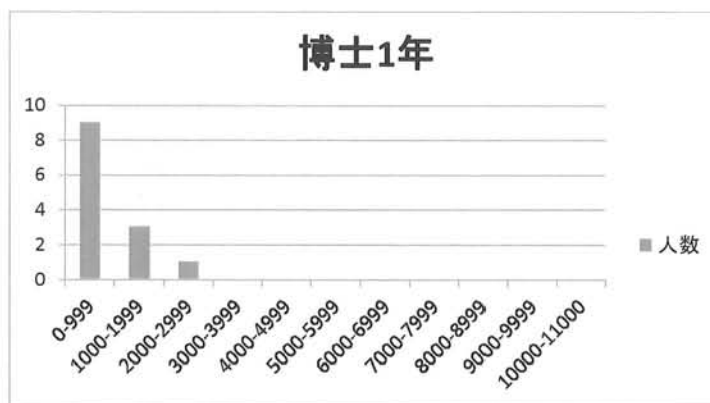
枚数	人数	累積%
0-499	2	25%
500-999	3	63%
1000-1499	1	75%
1500-1999	0	75%
2000-2499	1	88%
2500-2999	1	100%
3000-3499	0	100%
3500-3999	0	100%
4000-4499	0	100%
4500-5000	0	100%
計	8	



2011年度印刷枚数
集計期間： 2011/04/01-2012/03/31

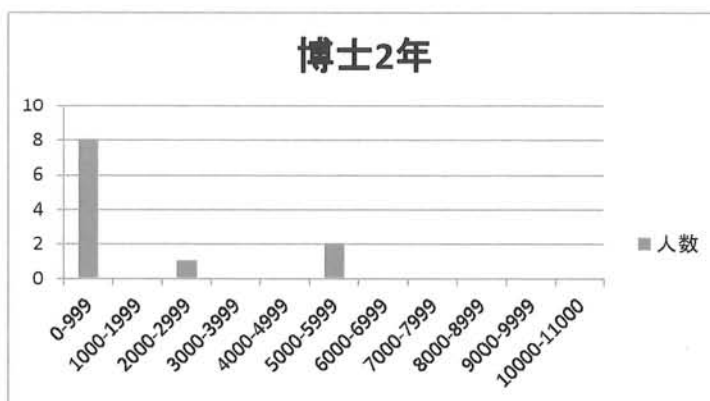
博士1年
総印刷枚数 11,486
90パーセンタイル 1,837
上限枚数 5,000

枚数	人数	累積%
0-999	9	69%
1000-1999	3	92%
2000-2999	1	100%
3000-3999	0	100%
4000-4999	0	100%
5000-5999	0	100%
6000-6999	0	100%
7000-7999	0	100%
8000-8999	0	100%
9000-9999	0	100%
10000-11000	0	100%
計	13	



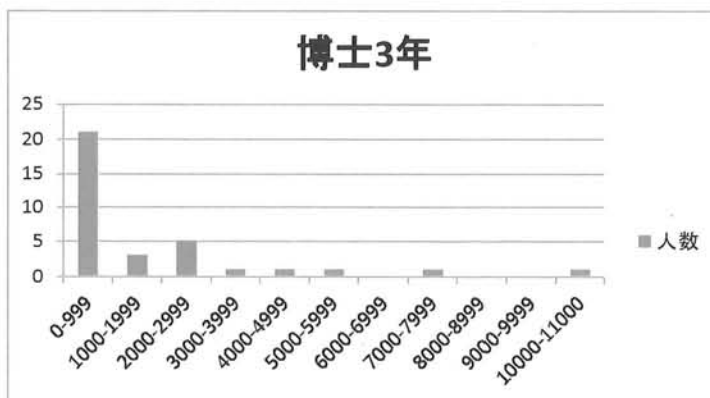
博士2年
総印刷枚数 16,953
90パーセンタイル 5,741
上限枚数 5,000

枚数	人数	累積%
0-999	8	73%
1000-1999	0	73%
2000-2999	1	82%
3000-3999	0	82%
4000-4999	0	82%
5000-5999	2	100%
6000-6999	0	100%
7000-7999	0	100%
8000-8999	0	100%
9000-9999	0	100%
10000-11000	0	100%
計	11	



博士3年
総印刷枚数 52,598
90パーセンタイル 4,507
上限枚数 10,000

枚数	人数	累積%
0-999	21	62%
1000-1999	3	71%
2000-2999	5	85%
3000-3999	1	88%
4000-4999	1	91%
5000-5999	1	94%
6000-6999	0	94%
7000-7999	1	97%
8000-8999	0	97%
9000-9999	0	97%
10000-11000	1	100%
計	34	

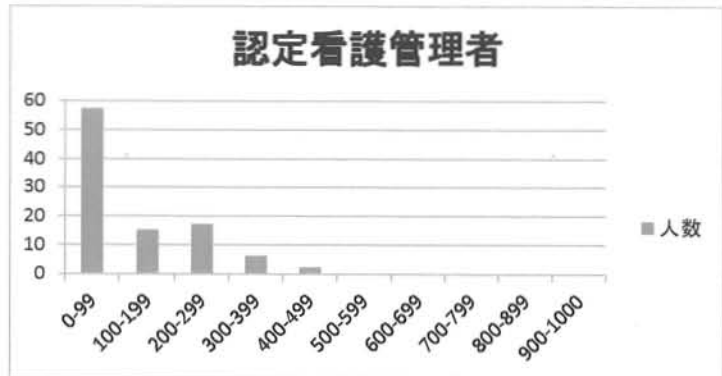


2011年度印刷枚数
集計期間：2011/04/01-2012/03/31

認定看護管理者

総印刷枚数 11,615
90パーセンタイル 274
上限枚数 300

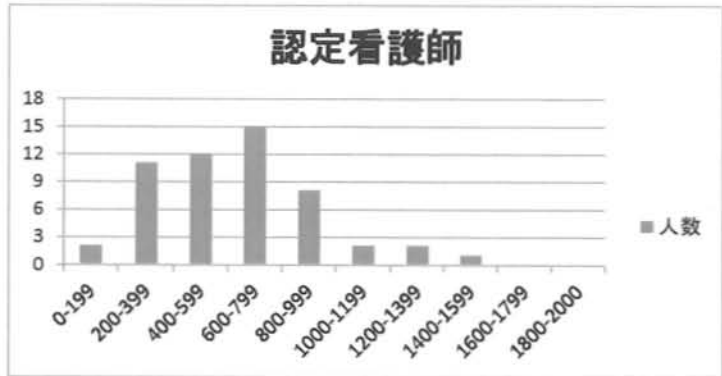
枚数	人数	累積%
0-99	57	59%
100-199	15	74%
200-299	17	92%
300-399	6	98%
400-499	2	100%
500-599	0	100%
600-699	0	100%
700-799	0	100%
800-899	0	100%
900-1000	0	100%
計	97	



認定看護師

総印刷枚数 33,647
90パーセンタイル 994
上限枚数 1,000

枚数	人数	累積%
0-199	2	4%
200-399	11	25%
400-599	12	47%
600-799	15	75%
800-999	8	91%
1000-1199	2	94%
1200-1399	2	98%
1400-1599	1	100%
1600-1799	0	100%
1800-2000	0	100%
計	53	



国際交流委員会

1. 構成員

[委員長] 大久保暢子

[委員] 堀 成美、五十嵐ゆかり、Jeffrey

Huffman、中島 薫

2. 役割・職務

国際交流委員会規程に基づく。

3. 活動内容

- 1) タイ・マヒドン大学シリラート校交換研修参加者（認定申請者4名）及び韓国・ヨンセイ大学交換研修プログラム参加者（認定申請者4名）に対する単位認定
- 2) ①マヒドン大学（2名）／ヨンセイ大学交換研修生受け入れプログラムの実施
②マヒドン大学／ヨンセイ大学交換研修生（各4名）派遣学生の募集、選考の実施
- 3) 学生国際交流委員会による交換研修生歓迎会、交流プログラムの企画及び実施

- 4) 聖路加看護大学 Global Health Seminar の実施
- 5) 新規協定校開拓検討及び相手先への交渉
- 6) 学生の国際感覚の醸成に向けた課題抽出作業（前期・13回実施）

4. 課題

- 1) 受入先の事情により、米国・ヴィラノバ大学との交換留学プログラムを2010年度で終了した。これに代わる新しいプログラムを引き続き検討し、早急に具体化する必要がある。
- 2) 内向き志向の若者をグローバル化するための国家方針が出されている。本学においても、グローバル人材育成をより強化することが重要である。本学学生のグローバル化を推進するための施策を検討し、それに伴う資金の獲得を行う必要がある。
- 3) 1)・2) の課題に取り組むため、委員会の活動目的を含む規程の見直しが必要である。

5. 資料・データ

表1 交換研修プログラム等実績

国	学校・プログラム名	滞在期間	参加者名
受入	タイ マヒドン大学 ラマティボディ校	2011年9月19日(月) ～10月1日(土)※	Ms. Kamontip Santi (4年生) Mr. Teerayut Yoonun (4年生)
	韓国 ヨンセイ大学	2012年1月6日(金) ～1月19日(木)※	Ms. Kim Ji Young (3年生) Ms. Ryu Seunghee (3年生) Ms. Lee Chieun (3年生) Ms. Lim Young Sun (3年生)
派遣	タイ マヒドン大学 ラマティボディ校	2011年8月10日(水) ～8月23日(火)	松本 砂里(学士15回生) 山田 珠里(学士15回生) 川又 美波(学士14回生) 川野 嘉子(3年生)
	韓国 ヨンセイ大学	2011年9月14日(水) ～9月27日(火)	関谷 明希(4年生) 林 蓉子(4年生) 平島 萌子(4年生) 安田 みなみ(4年生)

※震災の影響により、受入時期を変更して実施（タイ：5月→9月、韓国：6月→1月）

表2 看護大学 Global Health Seminar2010 実績

日時	講師/発表者名、内容		参加人数
2011年 4月16日(土)	吉野八重 (Class of 1997)	JICA 母子保健プロジェクト 国際保健分野におけるキャリアプラン	43名
	五十嵐ゆかり	日本における難民支援	
2012年 1月14日(土)	キタ(林田)幸子 (2009年大学院修士課程 修了)	米国の助産師資格取得に向けて (資格試験 NCLEX-RN) アメリカで見た看護・助産の実際	65名
	ヨンセイ大学交換研修参 加学生	(本学学生) プログラム参加報告 (ヨンセイ大学学生) 韓国の医療保健制度について	
	学生国際交流委員会	参加者交流会	

表彰運営委員会

1. 構成員

[委員(教職員)] 山田雅子、實崎美奈、櫻井文乃、
森島久美子、畠山小巻

[委員(学生)] 岸本梨沙・小林俊介(4年生)、
横林典子・高取由美(3年生)、丸山 紗希・別府
紫・安本 悠・浅海りり子・田中千紘(2年生)、
今井 理佳子・甕 満奈美(1年生)、杉山 栄美子
(学士15回生)

2. 役割・職務

学生や教職員が互いの努力を称え、感謝の気持ちを伝えあう機会を作ることを目的とする。

3. 活動内容

昨年度の表彰については、教員・職員より概ね好評であったため、今年度は昨年度と同じ内容で活動を継続し

5. 資料・データ

表 表彰および紹介対象者一覧(敬称略)

項目	表彰及び紹介対象者
グッドプレゼンター賞	「患者の安楽や状態の改善につながったと思う看護技術の実践が看護師にもたらすもの」 糟谷 祥子さん
グッドティーチャー賞	伊藤 和弘教授(社会学担当)
チャプレン賞	「十字架上の死とその生理的過程について」 遠藤まりえさん、高橋孝さん、徳永亜衣子さん、星名美佳さん、望月優加さん
グッドボランティア	福島県災害支援プロジェクト「きぼうときずな」 ・岩田証子さん ・「るかなび」ボランティアチーム、 ・相馬市の全戸訪問に参加した関晴菜さん、河崎舞子さん、大畑美里先生

た。引き続き、ランキングを重視しないこと、教員・職員・学生・関係者を広く表彰の対象とすることに留意した。なお、グッドプレゼンター及びグッドティーチャーについて、投票数を増やすことを課題として取り組んだ。

表彰式は、創立記念行事に引き続き、講堂で開催し、学園ニュース、同窓会だより、看護ネットに紹介した。

4. 課題

4年生の総合看護・看護研究Ⅱ(卒業論文)への投票数が少ないことには、ポスターの展示期間を延長してみたが、効果はなかった。90編の研究成果に目を通し投票するというところに根本的な課題がありそうだ。効率よくより良い研究を投票できるシステムを検討する必要がある。グッドティーチャーについては、個別に記入依頼をしたことで、特に大学院生からの投票数が増えた。引き続き表彰運営委員会の活動を広報しながら、地道に参加者を増やしていきたい。

	<ul style="list-style-type: none"> ・協力を活動を支援した聖路加看護大学同窓会のみなさん ナイトフレンドのみなさん 「るかなび」 ・専門職ボランティア 松本女里さん ・市民ボランティア 秋元君男さん
SL スター	<p>木下勇輝さん（4年生）、邊見由紀子さん（学士15回生）、越敏治さん（用務）、菱沼義三さん（用務）、酒巻豊次さん（用務）、池ノ上久美子さん（清掃スタッフ）、石渡知美さん（チューターSE）、平塚岳人さん（学食シェフ）、佐藤園子さん（鎌倉アリスの家）、宇都宮明美先生（成人看護学）、堀成美先生（看護教育学）、玉谷知佳さん（2年生）、真下結さん（2年生）、皆川愛さん（1年生）、佐藤恵美子さん（1年生）</p>
学会等で受賞された方の紹介	<p>柳井晴夫 教授（日本行動計量学会 杉山明子賞（出版賞））</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「Projection Matrices, Generalized Inverse Matrices, and Singular Value Decomposition」 <p>亀井智子 教授（日本遠隔医療学会 優秀論文賞）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「COPD IV期の在宅酸素療法患者を対象としたテレナーシング実践ートリガーポイントによる在宅モニタリングデータの検討ー」 ・日本老年看護学会から23年6月に研究論文優秀賞 「地域在住高齢者を対象とした Home Hazard Modification Program の効果」 <p>梶井文子 准教授（平成23年度第12回日本認知症ケア学会 石崎賞）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「多職種間連携に必要な在宅認知症高齢者と家族に関するアセスメント・評価項目の検討」 <p>佐居由美 准教授（第9回日本看護技術学会学術集会 日本看護技術学会大会賞）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「看護学導入期の学生の困難性に対応したWeb教材の有用性」 <p>大橋久美子 助教（第9回日本看護技術学会学術集会 日本看護技術学会大会賞）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「術後急性期患者の朝の活動性を高めるモーニングケアー歩行介助を要する整形外科患者における効果ー」

紀要委員会

1. 構成員

〔委員長〕 林 直子

〔委員〕 伊藤和弘、實崎美奈、田代真理、田口 瞳

2. 役割・職務

1) 聖路加看護大学紀要委員会規程を参照

3. 活動内容

1) 紀要第38号の発行

- (1) 5月および7月のFSミーティングおよびメールにて、投稿申込み期限の変更（昨年まで6月としていた期限を9月に変更）と、それに伴う査読依頼時期の変更を周知した。
- (2) 当初設定していた期限（9月2日）までの投稿申込み数が少なかったため、9月のFSミーティングで再度投稿の呼びかけを行い、期限を延長して投稿申込みを募った。
- (3) 投稿申込み数が確定した後に複数業者から見積もりを取り、業者を正式に決定した。
- (4) 11月に投稿原稿を受け取り、編集・校正作業を行った。

(5) 投稿申込み時点での原稿数は16本（原著1、研究報告4、短報11）、その後、論文種類の変更があり、最終的な原稿数は16本（原著1、研究報告2、短報13）となった。

(6) 3月15日に700部を配布した。

2) 紀要投稿要項の改訂と周知

昨今の投稿状況に鑑み、投稿要項の「投稿資格者」「倫理的配慮」「原稿の構成と表記：図表の取り扱いについて」の3点について委員会で検討し、下線のように改訂した。

- (1) 「投稿資格者①」は、これまで本学専任教員としていたが、教員、職員は同等の資格を有すると考えられることから、「本学専任教員」から「本学専任教員・職員」とした。
- (2) 「投稿資格者③」は「①の共同研究者、その他紀要委員会委員長が適切と認めた者」としていたが、これまで学部学生、大学院生の投稿も認めてきたことから「①の共同研究者（学部生、大学院生を含む）、その他紀要委員会委員長が適切と認めた者」とした。
- (3) 「倫理的配慮」は、投稿論文の倫理的側面の質を担保するため「倫理審査の過程を経た旨を本文中に明記する」とし、倫理審査を受けていることが必須であることとした。

(4) 図表は1点につき400字相当としていたが、明らかに400字に相当しない、容量の大きい図表が散見されたことから、「原稿の構成と表記 1)」にこれまでの「図表は1点につき、400字相当とする。」に加えて「ただし、通常の大きさでは印刷できないサイズの図表は400字以上相当とする場合がある。」の文言を加えた。

以上の改定について、3月6日のファカルティ・スタッフミーティングの場で周知した。

4. 昨年度の課題に対する取り組み成果と次年度の課題

- 1) 紀要の投稿申し込み期限を原稿締め切り時期に近い9月に変更した結果、今年度は投稿希望の取り下げがなく、かつ掲載論文数も増加した。FS ミーティングで再三募集の呼びかけを行ったことも奏効したと考える。次年度もこの方策が有効だと思われる。
- 2) 今年度予定していた「紀要37号」に対する意見を広く求める機会を得ることができなかった。論文種類に対する個々の論文内容の適正、紀要全体に対する意見を広く求め、改善点を見出すことを次年度の課題とする。
- 3) 紀要40号(10号ごとの記念号)発行に向け、次年度以降企画を検討する。

オリエンテーション・セミナー委員会

1. 構成員

[委員長] 松谷美和子、菊田文夫(4月末まで)

[委員] 大橋久美子、木戸芳史、Jeffrey Huffman

2. 役割・職務

新入生オリエンテーション・セミナーの企画および実施

3. 活動内容

1) 新入生オリエンテーション・セミナーの開催

今年度は、3月11日に発生した東日本大震災の影響により、前年度から企画してきた山梨県清里での開催が中止となった。そのため開催場所を大学に変更し、急遽予定を組み直して、4月7日に実施した。新入生が本学の建学の精神とミッションを理解し、大学生活をイメージできるように、新入生同士、先輩、教職員との親睦を深めながら、今後の学生生活

の助けとなる企画を実施した。プログラムは次のとおりである。

(プログラム)

12:00~13:30:

チャプレンによるお祈り

理事長・学長への質問タイム

昼食(立食、ケータリング)・交流会(2階ラウンジにて)

13:30~15:30:

築地周辺案内

新入生5~6名に上級生1名がひとつのグループとなり、3コース(築地コース・月島コース・銀座コース)の中から1コースを選んで1時間程度の散策を実施。

15:30~17:00: 上級生企画(学年毎の学校生活の紹介)・交流会(2階ラウンジにて)

4. 課題

自然災害による企画の変更を余儀なくされた今年度であったが、それまで培った準備過程でのチームワークが十分に機能し、プログラムの変更および実施が可能となった。とりわけ、上級生企画においては、在校生が一丸となって、新入生のために積極的な準備と自主的な運営を行ったことは特筆すべきである。この企画を通して心から歓迎されていると感じた新入生は、上級生に憧れ、来年度以降は、自らが上級生スタッフとして参加したいという感想も多く聞かれた。このように、今後も準備期間におけるチームづくりを行っていく意義が示された。また、オリエンテーション・セミナーは、新入生のスタートを支援する集中プログラムであり、今後は、その成果を検討する必要がある。課題としては、何を成果と考えるか(短期的成果および中長期的成果)をまず明らかにすることが求められる。短期的成果の検討から改善点の示唆を得、中長期的成果の検討から他部門や上級生との連携の視点が見えてくる。これにより、オリゼミが単発の一時的な行事というよりも、むしろ重要な入り口としてのイベントであることが学内により一層認識され、学内全体での取り組みとして再認識されていくものと考えられる。

FD・SD委員会

1. 構成員

[委員長] 飯岡由紀子

[委員] 留目宏美、松本直子、豊島景子、倉岡有美子（後期産休・育休）

2. 役割・職務

学部・大学院の教育・研究活動及び大学組織運営推進のためのFD・SD活動を行う。

3. 活動内容

1) FD・SD研修会の企画および実施

(1) FD・SDマップを基にレベル別研修を4回行った。

①レベルⅠ研修（2011年8月4日13:00～16:00）

「Team Based Learning (TBL) の概念と形式の授業デザイン」と題し、TBLに関する講義のあり方や能動的学習を促す工夫の理解を深め、教育活動への示唆を得ることを目標に行った。講師に瀬尾宏美氏（高知大学医学部附属病院総合診療部）を招き、講演と演習（TBLを体験する演習）を行った。31名が参加し、アンケート結果では、講演と演習ともに全員が大変有意義と回答した。また「コースデザインと学生主体のアクティブラーニングを考えることができた」「困難に思っていることへの道が開けた」などの意見があり、興味深いという意見も多数あった。

②レベルⅠ研修（2011年8月3日14:00～17:00）

「心地よいコミュニケーションスキルを磨く」と題し、アサーティブネスの基本的な知識・方法を学び、日常の業務に活かすことを目標に行った。講師に森田汐生氏（NPO 法人代表理事アサーティブジャパン）を招き、講演とロールプレイングを行った。24名が参加し、アンケート結果では講演や演習に対し、「大変有意義」と「まあまあ有意義」と回答した。自由記載には「管理職にも有益だった」「定期的に続けてもらおうと定着する」や、「ロールプレイで自分の苦手な部分やクセがわかった」、「ロールプレイは楽しめた、もう少し時間が欲しい」などの意見があった。

③レベルⅡ研修（2012年3月15日15:00～17:00）

「マニュアル化世代に対する教職員の対応のあり方を考える」と題し、学生や教員の困難性に関する研究成果報告を踏まえて、本学におけるマニュアル化世代の学生への対応の仕方、教育のあり方などについて考えることを目標に行った。菱沼科研（本学）による研究成果発表に加えて、グループ討議を行った。60名が参加し、アンケート結果では6割が大変重要なテーマと回答し、6割が目標を「まあまあ達成できた」と回答した。「様々な立場の教職員でディスカッションができ学びになった」等の意見があった。

④レベルⅢ研修（2011年8月2日14:00～16:00）

「聖路加看護大学の災害対策について考える」と題し、他大学の災害対策状況を踏まえ本学の災害対策や個人が危機管理にどのように取り組むのかを考えることを目標に行った。講師に新地章倫氏（立教大学総務部副部長）を招き、講話と全体討議を行った。48名が参加し、アンケートでは7割以上が大変有意義と回答し「地域との連携や放射能対策など参考になった」、「本学の対策を再考できた」等の意見があった。

(2) 本学客員教授 Kathleen.Norr による講演会を行った（2011年12月6日17:00～18:30）。テーマは昨年度に引き続き Mixed methods part 2 と題し、Norr 先生の研究データを含めたより実践的な内容でミックス法の講演していただいた。

2) 看護系大学におけるFD・SDマップの開発 昨年度研修プログラム（案）としていたFD・SDマップの内容を更に洗練させ、FD・SD概念図とFD・SDマップを開発した。

4. 課題

1) FD・SD研修会は、FD・SDマップを基にレベル別研修を企画した。4回の研修会は概ね評価は高かった。今後もレベル別研修を継続することを検討する。

2) 参加型研修形式を多く取り入れたが、演習やロールプレイングの評価は高かった。テーマ設定にもよるが今後も研修形態を工夫しながら研修会を企画する。更に、開催時間を2～3時間にしたことは概ね好評であったことより、今後も効率的な研修会を工夫する。

5. 資料・データ

看護系大学における FD・SD 概念図、看護系大学における FD・SD マップを資料とした。

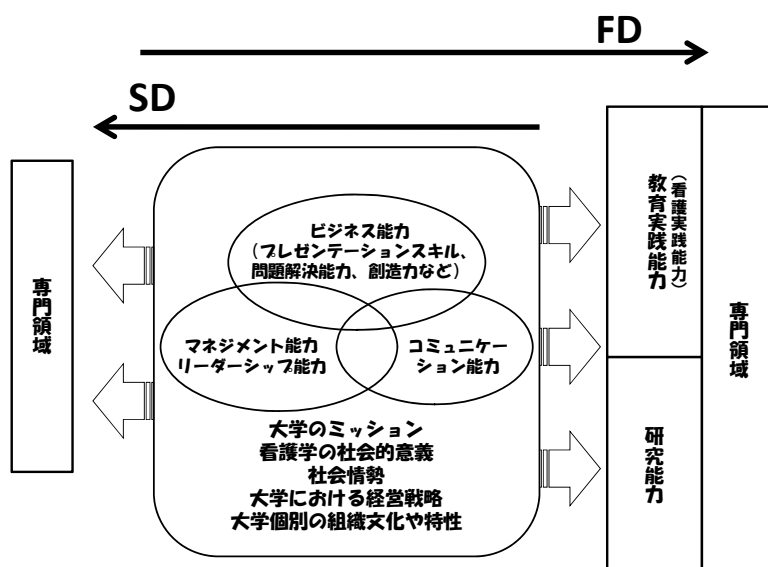


図1 看護系大学における FD・SD の概念図

看護系大学教職員のためのFD・SD マップ

	レベル目標	教育能力開発の目標	具体的内容	研究能力開発の目標	具体的内容	FD・SD共通の目標	具体的内容	
level I	基礎的知識と基本的スキルを備える	・科目内の分担講義を運営するための基本的方法を理解する	・講義づくり、授業評価など	・競争的研究員獲得スキルに関して理解を深める	・研究計画書の書き方、競争的研究員獲得のポイント、フィールドの開拓方法など	・職場環境に関する理解を深める	・自校教育(本学の発展と看護の発展)など	
		・科目を運営・評価・開設するための基本的方法を理解する	・試験の作成(例,CBT)など	・研究方法に関する理解を深める	・研究デザイン、研究手法に関することなど	・大学教育組織に関する理解を深める	・大学指定規則、大学評価基準など	
			・シラバスの書き方(科目目標の設定なども含む)など			・コミュニケーションスキルに関する理解を深める	・アサーティブネスなど	
			・教育評価、評価基準の作成など				・情報の管理・運営に関する理解を深める	・個人情報取り扱い方、情報リテラシー、アカデミシティなど
		・教育倫理に関する理解を深める	・教育倫理など				・説明能力を高める	・プレゼンテーションスキル、情報発信など
		・教育方法に関する理解を深める	教育方法(例:PBL、TBL、リフレクシオン、ポートフォリオ)に関することなど				・自己マネジメントができる	・時間管理、work-lifeバランス、ストレスマネジメントなど
			・アンリテラシー、グループダイナミクスなどグループ学習の展開に関することなど				・看護学の社会的意義、社会情勢に関する理解を深める	・看護学の動向、看護学の歴史、看護学の研究動向など
		・カリキュラムに関する理解を深める	・本学カリキュラムの特徴、科目の積み重ねに関することなど					
・実習体制を整えることができる	・臨床スタッフとの調整、カンファレンスの活用、グループダイナミクスなど							
・実習における指導力を身につける	・臨床教育のあり方など							
level II	能力を向上させる	・学習目標に適した教材開発能力を高める	・教材開発、学習課題の開発など(例,paper patientの作成、PBL、TBLの課題作成)	・研究手法のスキルが向上する(質的分析・統計学など)	・文献検索スキルなど	・コミュニケーション能力を高める	・特性やパーソナリティに応じた対応、意欲を高める関わりなど	
		・学習指導能力を高める	・授業参観を行い、ピアグループによる授業評価など		・質的分析など		・問題解決能力、創造力を高める	・問題解決技法、変革理論など
			・指導が難しい学生(例感情が不安定、学習意欲が低い、コミュニケーション能力が極端に低い)への指導など		・統計学的分析など	・他部門との連携・協働能力を高める	・協働、共同、連携のあり方など	
		・カリキュラム管理・運営に関する能力を高める	・カリキュラム全体の整合性・順序性の検討、課題の明確化に関することなど	・論文作成能力を向上する	・英語論文作成など	・効果的な自己マネジメントができる	・キャリアディベロップメントなど	
		・実践能力を高める	・看護実践のブラッシュアップなど(例、最新機器の活用方法、最新知識の獲得)			・学生への対応能力を高める	・健康上の問題や障害のある学生、対応が難しい学生への対応など	
level III	社会的な課題に取り組む 複雑な事象に対応できる 指導・管理的能力を養う	・カリキュラムの構築と評価ができる	・カリキュラム開発と評価など	・研究の管理運営ができる	・研究のリスクマネジメントと倫理的課題など	・大学における経営戦略の企画・運営に携わる	・大学経営や将来構想など	
		・教育経験が深い者へ指導ができる	・教育指導者研修、教育に関する相談と対応など	・産学協同プロジェクト、事業展開に向けた取り組みを理解する	・産学協同プロジェクト、事業展開に向けた取り組みなど	・特別な事象(健康上の問題や障害のある学生など)における体制を整える	・教育環境や実習体制の整備など	
		・自らの教育能力を省察することができる	・ナラティブ・アプローチやリフレクシオンなど	・研究における協働活動を運営できる	・アクションリサーチ、CBPR(Community Based Participatory Reserch)など	・リスクマネジメント能力が高まる	・ハラスメント、トラブル発生時の対応など	
						・部下・部門内組織マネジメントができる	・災害時や緊急時の対応など	
						・人材育成、目標管理など		